序　章

第１節　問題の所在

カリキュラム開発をめぐる主な争点は、カリキュラムを誰(who)が、そしてどのように(how)決定するかである。この争点のもとで、カリキュラム研究は、教師の役割をどう捉えればよいかという問題に直面している。なぜなら、教師はカリキュラムの最終的な実行者であって、カリキュラム開発と教師とは不可分な関係をもっているからである。ここでいう教師の役割とは、カリキュラムを開発する際に、教師によって行われる参加の範囲とその内容を示す。例えば、教師をカリキュラムの開発者(developer)とみなすか、それとも使用者(user)とみなすかの違いによって、教師がカリキュラム開発に参加する範囲とその内容が異なってくるわけである。

カリキュラム開発における教師の役割に関する論議の始まりは、１９３０年代アメリカのカリキュラム作成・普及(curriculum making・diffusion)運動の時期にまで遡ることができる。この時期は進歩主義教育が普及しており、カリキュラム作成が教師の専門的領域として位置付けられていた。その結果、カリキュラム開発への教師参加の重要性が強調されている時期であった。しかし、その後、OECD加盟国を中心とする、各国が教育の中央集権化を図った５０，６０年代、開発の主体は専門家であり、研究・開発・普及(research, development, diffusion、以下、ＲＤＤと表記する)の手続きがとられていた。この手続きは主に中央が決定したカリキュラムの普及と定着を図るという観点から考えられており、教師の役割はカリキュラムの使用者として明確に位置付けられている。この手続きによる開発は、カリキュラム開発への教師の貢献を看過しており、教師が児童・生徒とのやりとりから構成する実践的知識をカリキュラム開発に生かせないという問題点を抱えている。

今日、日本や韓国を含め、中央集権型の国ではこのパターンがとられている。このため、日本や韓国の学校現場では、「カリキュラム開発」という言葉が使われておらず、主として「教育課程の編成」または「教育課程の計画」の用語が使われている。すなわち、学校現場では、カリキュラムを開発することよりも、中央によって作成され、普及が図られる「学習指導要領」（韓国では「教育課程」と示している）にしたがって、年間指導計画または教育計画を作成しており、これが教育課程の編成または計画とされている。しかも、

教授・学習の媒介となる教育内容は教師が自ら決定するのではなく、都道府県教育委員会が採択した教科書によって規定されている。したがって、日本や韓国において、カリキュラム開発における教師の役割は、主に中央から普及されるカリキュラムの使用者として位置付けられ、教育内容を決定することよりも、それをどう教えるかという教授方法または指導方法を工夫することにおかれている。

しかし、「教授・学習の改善によって学校を改革する」[1]というカリキュラム開発の目的を実現するためには、教授・学習を担っている教師の実践的知識を生かすべく、彼らの役割をカリキュラムの使用者ではなく、開発者として再規定することが必要である。また、多様性が求められている今日の教育現状では、カリキュラムを国家レベルのみで開発することに限界が生じており、日本や韓国のような中央集権型の国ではますます学校の裁量権を拡大するなど、カリキュラム開発への教師の参加を促すことが必要である。この必要性によって、教師の役割に関する研究は、今日のカリキュラム研究が直面する緊要の課題となっている。これに応じて、本研究では、教師の役割をカリキュラム開発者として捉え、その観点に立って、教師の役割遂行過程を明らかにすることを意図している。

本研究で取り上げている教師の役割は、学校レベルのカリキュラム開発に限定して捉えている。カリキュラム開発は、国レベルの、都道府県や市町村の地方レベルの、学校レベルのもの、さらに学年や学級レベルののもに分けられるが、SBCDの視点に立つ本研究においては、このうち学校レベルのものに焦点を当て、その開発過程における教師の役割と遂行過程をめぐる問題を取り上げる。その際、国や地方のレベルにおける開発と学校レベルにおける開発との関係の在り方を明らかにすることが本研究の一つの課題になる。

カリキュラム開発における教師の役割に関する論議の焦点を絞るため、カリキュラムとカリキュラム開発を次のように定義しておきたい。この２つを定義する理由は、カリキュラムの捉え方が論者によって異なっており、全体として多様だからである。第１に、カリキュラムは教授・学習のための２つの基本的な問い、すなわち「何(what)を教えるか」ということと「どのように(how)教えるか」ということに答える分野である。教授・学習の媒介となる「内容」との関連からいえば、カリキュラムとは「学校で教育を行うに際して、教授・学習と関連し、学校が児童・生徒に提供する経験の総体」であると定義される。また、その内容を展開する「方法」との関連からいえば、カリキュラムとは「教育目標を設定し、内容を選定・組織し、評価するという一連の過程(process)」と捉えられる。第２に、カリキュラム開発は教授・学習の媒介となる内容とその内容を展開する過程を創り出して

いく実践的意思決定の行為である。それゆえ、本研究は、「カリキュラムの改善を目的とし、計画し、実行し、評価・フィードバックする一連の実践的意思決定の行為」をカリキュラム開発の基本的な概念と捉えている[2]。

したがって、本研究でいう、カリキュラム開発における開発者としての教師の役割とは、教授(teaching)の行為を越えて、教授・学習の媒介となる内容とその展開方法を教師自らが創りだし、実行することを示す。

日本や韓国において、教師の役割に関する研究の傾向をみると、カリキュラムに関する教師の役割を論じる研究がほとんどみられず、主として授業研究に止まっていることがわかる。例えば、意思決定研究の多くは授業研究の分野で行われており、研究の対象も主に教授・学習場面での教授行為に限られている。その結果、教師の専門的内容に関する議論も教授方法レベルに止まっていて、現在求められている各学校でのカリキュラム開発という課題は十分検討されていない現状である[3]。最近、佐藤学が「授業に基づくカリキュラム」という名で、教師の役割の在り方を論じているが、開発者としての教師の役割遂行とその方法について明確に述べているものではない[4]。

他方、欧米において、カリキュラム開発者としての教師の役割に関する理論的、実証的研究の始まりは、７０年代にまで遡及できる。その研究のきっかけとなったのが「学校に基礎をおくカリキュラム開発」（School Based Curriculum Development、以下、SBCDと表記する）である。それまで、カリキュラム開発の研究は、主に、ボビット(Bobbitt, F.)とチャーターズ(Charters, W.W.)の科学的アプローチを始め、タイラー(Tyler, R.)の合理的アプローチに至る系譜を形成する、行動主義理論に基づく科学的、システム的アプローチが主流となってきた。しかし、この系譜の研究は、カリキュラム開発の理論を構築し、一般化を図った結果、カリキュラムの理論と実践とのギャップをもたらした。その結果、７０年代に入ってから、行動主義理論を基盤とする研究は、カリキュラムの実践的特性を見逃していると激しく批判を受けることになる。その先駆けとなったのがシュワブ(Schwab, J.)の「実践性」(the practical)の理論[5]である。その後、この系譜を受け継いでいる、ウォーカー(Walker, D.)やスキルベック(Skilbeck, M.)などの研究者によって、カリキュラム開発の科学的、システム的アプローチの克服が試みられてきた。これらの研究者によって、ＲＤＤアプローチの代替案として生まれたSBCDが、カリキュラム開発を研究する視点となり、研究の重点が従来捉えられていた使用者としての教師の役割から開発者へと見直す契機となった。７０年代に注目されたSBCDの基本的な考え方の一つは、「学校におけ

るカリキュラムの決定が最良の形で行われるのは、教師の行為によってである」[6]というものである。SBCDのこの考え方に基づく教師の役割研究は、教師を開発者と位置付け、その理論的ならびに実証的研究を進めてきた[7]。しかし、SBCDの考え方は８０年代からナショナル・カリキュラムの登場によって後退し、今日のカリキュラムの文献ではほとんど見られなくなっている。

９０年代の現在、欧米において、国家のカリキュラム基準を強化しようとするナショナル・カリキュラムが、学校カリキュラムの多様性と教師の専門性を弱化させるという観点から批判され、学校に基礎をおくカリキュラムに関する関心が再び呼び起こされている[8]。また、日本の場合も、特色のある学校カリキュラムづくりを図り、選択教科制の拡大や総合学習の設置、総合学科の運営などで、ますますカリキュラム開発への教師参加が求められている。

このような動向に応じて、学校カリキュラムを検討していく場合、SBCDの視点は、開発者としての教師の役割を明確にするための重要な手がかりになると考える。本研究では、SBCDの視点を、「カリキュラム開発の場を学校、開発の主体を教師と位置付け、学校の現実に応じたカリキュラムを開発しようとする発想である」と捉えている。なぜなら、SBCDはカリキュラムの意思決定権を中央から学校と教師へと委譲しようと試みる考え方だからである。

SBCDの視点に基づく教師の役割遂行過程に関する本研究は、次の３つの点で意義があると考える。

第１に、カリキュラム開発への教師参加に関する当為論的な論議を越えて、開発者としての教師が果たす役割を理論的、実証的に検討することである。カリキュラム研究の多くはカリキュラム開発への教師参加の必要性を認めながらも、教師の役割に関する理論的、実証的分析の提示は十分ではない。

第２に、学校レベルで、教師がカリキュラムに取り組む際、役割遂行を理解するための基礎資料を提供できる。すなわち、「カリキュラム開発は、現代の学校が直面する緊要の課題であるにもかかわらず、これに必要な資料が系統的に収集され蓄積されてこなかった」[9]という指摘に答えると考える。

第３に、教師のカリキュラムの専門性を育成する、教師教育に必要な基礎資料を提供できる。前職教育(pre-service education)と現職教育(in-service education)を含めて、教師の専門性を育成するための教師教育の重要性はいうまでもない。しかし、日本や韓国の

場合、教師教育、とりわけ現職教育は中央のカリキュラムを円滑に実行するための訓練に関心を払っており、主に教授に関する専門性を育成するためであった。しかし、カリキュラム開発への教師参加が求められつつある今日、カリキュラムの専門性を育成するための教師教育は必然的なものである。

このように、SBCDは教師の役割を見直す視点として、日本や韓国の教師の役割に関する研究を一層発展させる可能性を示すものである。日本におけるSBCDの考え方の導入は、周知の通り、１９７４年東京で行われた「カリキュラム開発に関する国際セミナー」がきっかけとなった。その後、日本では従来の教育課程の編成または構成とは別に、カリキュラム開発が論じられるようになっており、カリキュラム文献ではSBCDが取り上げられ、紹介されている。しかし、それらの大部分は、SBCDの捉え方を論じることに止まり、SBCDの視点に基づくカリキュラム開発過程と教師の役割遂行過程とを関連づけて、理論的、実証的検討が行われてこなかったという不十分さをもっている。このため、カリキュラム開発への教師参加が求められている今日の学校において、教師の役割に関する理論的、実証的な研究を行うことを意図している。

以上のように、本研究では、教師の役割に関する従来のカリキュラム研究の不備を補うため、SBCDの視点から、カリキュラム開発における教師の役割とその遂行過程を、理論的、実証的に検討する。

このような趣旨から、本研究の課題として、次の４点を設定する。

第１に、SBCDの登場を前後とする各国の動向とOECD/CERI[10]の活動を検討し、SBCDの基本的な発想を、カリキュラム開発の場と主体、開発されるカリキュラムの特徴の側面から明らかにする。

第２に、SBCDに関する理論的類型を扱っている諸文献を検討し、SBCDにみられる教師の役割の特徴を明らかにする。

第３に、カリキュラム開発の目標モデルに対する相互作用モデルの検討に基づいて、教師の役割遂行過程の理論的モデルを構築し、その有効性を検討する。

第４に、上記の理論的検討から、実証的研究のための分析枠組を設定し、選択教科制の場合を事例として取り上げ、分析を試みる。

第２節　先行研究の検討

教育社会学の分野で、主に役割葛藤を中心に、教師の役割に関する研究が行われているが[11]、本研究は教師の役割に関する社会学の視点を援用せず、SBCDの視点から、教師の役割とその遂行過程に関する理論的、実証的分析を行う。そのため、ここでは、カリキュラム開発における教師の役割に関する先行研究を検討し、本研究の位置付けを試みる。

カリキュラム開発における教師の役割に関する研究は２つの方向で行われている。一つは、カリキュラム開発に関する教師の自律性(autonomy)を認める研究であり、もう一つは教師の役割を中央集権的な教育行政組織の末端に位置付けて、カリキュラム開発は文部省や教育委員会などの教育当局で行われ、教師はそれを実行する役割を担う者として捉えているものである[12]。後者の研究の類型に属しているものとして、ヤング(Young, J.H.)[13]、ロビンソン(Robinson, F.G.)[14]、マクドナルドとリースウッド(MacDonald, R.A., Leithwood, K.A.)[15]、オルソンとキト(Olson, J.K., Kitto, R.)[16]、ローティ(Lortie, D.C.)[17]などが挙げられる。これに対して、前者の研究は、主にカリキュラム開発における教師の役割を開発者、意思決定者として捉えている。この研究の類型に属しているものとして、コネリー(Connelly, F.M.)[18]、コネリーとベン・ペレツ(Connelly, F.M., Ben-Peretz, M.)[19]、エルバズ(Elbaz, F.)[20]、ハーレン(Harlen, W.)[21]などが挙げられるが、SBCDの研究の大部分はこの研究の類型に属している。

教師の役割をカリキュラムの実行者または使用者と捉えている研究は、教師はそれほどカリキュラム開発に参加しようとはしていない、と述べている[22]。これらの研究は、教師はカリキュラム開発の重要性を認めてはいるものの、教師は主にカリキュラム開発よりも授業、そして、カリキュラム計画よりも開発されたカリキュラムを実行することにより関心を払っている、と主張している[23]。そのため、カリキュラム開発は教師よりも中央や地方の教育当局のような教育機関の役割とみなしている。この教育当局から生み出されるものがカリキュラム・ガイドラインである。ヤングは、カリキュラム・ガイドラインは教室で教師が行うカリキュラムの意思決定の枠組を提供するという[24]。リースウッドらは、カリキュラム・ガイドラインは教師がカリキュラムの目標を決定する際、重要な役割を果たすと述べており[25]、マクドナルドとリースウッドは、教師がカリキュラム・ガイドラインを使用すれば、教材を用意するのに時間の節約という効果があるし、主題の選定

と配列に役立っており、評価の信頼性を提供すると主張している[26]。

これらの研究者は、カリキュラム開発を、教師が行う作業よりも、教育当局のようなより幅広い機関によって行われるものとみなしている。教師はその機関によって生み出されたカリキュラム・ガイドラインにそってカリキュラムを実行する者だということである。その理由として、教師がカリキュラムを開発するための時間が不足しており、実際、教師はカリキュラムを開発することを望んでいないということも、その理由として挙げられる。また、上述したように、カリキュラム・ガイドラインのもつ客観性に信頼が寄せられている。そのため、これらの研究は、主にカリキュラム開発の効果性と効率性に注目しているということができる。

これに対して、前者の研究者たちは、教師はカリキュラムを研究し開発する過程に参加することを望んでいる、と主張している。すなわち、教師は彼らが使用するカリキュラムを自ら研究し決定しようとする意志をもっている、ということである。コネリーとベン・ペレツは、教師を外部の研究成果の実行者として規定している研究を批判し、開発者としての教師の役割を主張している。彼らは、教師が外部のカリキュラムをそのまま実行していないことに注目している[27]。また、カリキュラム開発への教師参加の重要性を強調しているハーレンは、カリキュラムを開発することに必要とされる知識と感受性(sensitivity)をもっているが、ただそれを行うことに必要とされる時間や動機(incentive)、外部の支援が不足しているため、教師は深く関わっていないだけである、という[28]。

マーティン・ニープ(Martin-Kniep, G.O.)は、2つの立場、すなわち専門家としての教師は教育の意思決定に参加する権限(the right)があるというイデオロギー的論議と、教師が開発したカリキュラムは他の教師がそれを使用するよう励ますため、教師はカリキュラム開発に参加すべきであるという実践的論議(pragmatic argument)によって、カリキュラム開発への教師参加が促されている、と述べる[29]。一方、ヤングは、カリキュラム開発における教師の役割を強調している研究は「①教師の思考過程に関する研究、②教師のカリキュラム意思決定を形成する影響に関する研究、③教師の複雑なカリキュラム計画を調査する方法論の開発に関する研究によって促されている」と指摘している[30]。

教師の役割をカリキュラム開発者として位置付けている研究は、教師がカリキュラムを開発することは困難であるという指摘に対して、教師の役割に関する捉え方を類型化し、その可能性を試みている。これは教師の役割を必ずしも専門家のような活動と同じように捉えず、教師が可能な活動を探ろうとすることである。なぜなら、教師のカリキュラム開

発への参加は時間的、専門的力量の限界をもつからである。そこで、例えば、コネリーとベン・ペレツは「教師は外部の研究成果を修正し応用したりしており、場合によっては自ら新しいカリキュラムを開発する」[31]と述べている。彼らは、開発者としての教師の役割を必ずしも専門家のような活動に限定せず、学校または教室の状況に応じて、外部のカリキュラムを採用したり、応用することも開発者としての教師の役割とみなしている。このような捉え方は、ベン・ペレツ[32]、サバとシャトリリ(Saba, N., Shatriri, N.)[33]、マクニール(McNeil, J.D.)[34]、タナーとタナー(Tanner, D., Tanner, L.N.)[35]、プリント(Print, M.)[36]によっても主張されている。また、このような教師の役割に関する類型化に基づいて、実証的研究を行ったのは、エグルストン(Eggleston, J.)[37]、ナイト(Knight, P.)[38]、ベン・ペレツとドー(Ben-Peretz, M., Dor, B.Z.)[39]である。この教師の役割に関する類型化は、本研究の第4章でより具体的に検討する。

以上のように、カリキュラム開発における教師の役割に関する研究については、カリキュラムの使用者と捉える立場と、開発者として捉える立場という、対照的な2つの立場がみられる。本研究は後者の立場、すなわち、カリキュラム開発における教師の自律性を認める研究の系譜に基づいている。本研究がこの系譜に位置づく理由は、上記の研究者が挙げていることの他、「問題の所在」で述べたように、カリキュラム開発の目的である教授・学習の改善によって学校を改革するというカリキュラム開発の目的を実現するためには、教授・学習を担っている教師の実践的知識を生かすべきと考えるからである。さらに、カリキュラム開発のもつダイナミズムによる即時的フィードバックの機能は、実行者である教師の参加によって、はじめて発揮されるからである。

また、開発者としての教師の役割に関する研究は、上記のように役割の類型化に関する理論的、実践的分析まで行われている。しかし、役割の遂行過程を分析するところにまでは進んでいないため、本研究は、それらの研究を一歩進めて、教師の役割遂行過程に関する理論的、実証的研究を試みる。

第３節　研究の目的と方法

１．研究の目的

本研究の目的は、教師を「開発者」として位置付けているSBCDの視点に基づいて、教師の役割とその遂行過程を検討し、カリキュラム開発に必要な教師の専門性の内容を明らかにすることである。

このような目的のもとで、研究内容を次のように設定する。

（１）カリキュラム開発の研究の系譜と概念を整理し、その中で本研究が占める位置を明らかにする。

（２）SBCDの登場を促した６０年代の教育政策が教師の役割に与えた影響を批判的観点から吟味し、その問題点を明確にする。

（３）SBCDによる教師の役割に関する特徴を明らかにするため、SBCDの捉え方とSBCDの理論的類型を考察する。

（４）教師の役割遂行過程をカリキュラム開発過程とカリキュラムの意思決定過程から明らかにし、SBCDの視点から教師の役割遂行過程を分析するための枠組を設定する。

（５）上記の分析枠組に基づいて、二つの中学校を対象として、選択教科制の運用における教師の役割遂行過程を実証的に分析する。

２．研究の方法

本研究は上記の目的を達成するため、歴史研究と理論研究、調査研究の方法をとって進めていく。

１）歴史研究

SBCDは７０年代に、当時の政治的、社会的状況を背景にして生まれたものである。本研究は、SBCDが登場した前後の時期に、教師の役割に関する論争が活発に行われたことに着

目し、SBCDの成立過程とそこで議論された教師の役割の捉え方を明らかにする。

SBCDの登場時期とその後の展開を年度別に記述することができるほど詳細に把握することは困難であるが、当時のOECD加盟国におけるSBCDによる実践の動向に共通した傾向がみられることに注目して、当時の文献・資料に基づいてその動向と傾向を明らかにする。

２）理論研究

SBCDは、カリキュラム開発の理念または運動論にとどまっているものではなく、カリキュラム研究者たちによって、理論的かつ実践的研究が行われたものである。本研究はこれらを扱っている諸文献を検討し、SBCDに基づくカリキュラム開発の理論的、実践的形態とモデル、主な国の実践成果を体系的に整理し、教師の役割の捉え方と役割遂行過程に関する理論的、実証的分析を試みる。

３）調査研究

本研究における調査研究の位置づけは、日本の学校カリキュラムにみられるSBCDの視点を解明し、その可能性と問題点を検討することにある。このため、理論的検討から構築した教師の役割遂行過程に関する枠組に基づいて、中学校の選択教科制の運用を事例として分析する。

事例として、選択教科制を取り上げた理由は、選択教科のコース設置やコース内容の決定が各学校の一定の自由裁量に任されているため、カリキュラム開発に関する教師の役割遂行を最も明瞭に観察できると考えたからである。

３．各章の概要

本研究の各章は、研究目的に基づき、上述した研究内容に対応して構成されている。

第１章は、研究内容（１）を明らかにする。まず、カリキュラム開発に関する研究を、ボビットとチャーターズの行動主義理論に基づくカリキュラム研究を受け継いでいるタイラー(Tyler, R.)などの合理的カリキュラム開発論と、シュワブ(Schwab, J.)の実践性(the practical)理論に基づくカリキュラム研究を受け継いでいるスキルベック(Skilbeck, M.)

などの相互作用的カリキュラム開発論の系譜があることを指摘し、本研究を後者の研究系譜に位置付ける。

次に、カリキュラム開発のもつ特徴を明確にするため、カリキュラムの構成や計画、デザインの概念を比較・検討し、学校レベルで行われるカリキュラム開発の基本的パターンを解明する。

第２章は、研究内容（２）を検討する。ここでは、６０年代のカリキュラム開発のパターンを決定したのが経済成長を優先する教育政策であったことに着目する。そして、この政策から生み出されたカリキュラム開発のＲＤＤアプローチと「中央－周辺論」が、教師の役割に及ぼした影響を、批判的観点から検討する。

第３章は、研究内容（３）に対応する。教師の役割に関するSBCDの考え方を明らかにするため、SBCDを扱った諸文献を検討し、SBCDの考え方とその理論的、実践的形態を体系的に整理する。まず、SBCDの考え方が、中央のカリキュラムに対するものとみなされていた初期の考え方から、中央や地方との連携という観点からみようとする考え方へと変化していることに注目し、その内容を検討する。次に、SBCDによるカリキュラム開発の形態は各学校によって多様であることに着目し、文献に基づく検討を通して、その理論的、実践的形態を整理する。

第４章は、研究内容（４）を扱う。ここでは、カリキュラム開発過程については、目標モデルに対する相互作用モデルに、そしてカリキュラムの意思決定過程については、学校に基礎をおくカリキュラム意思決定(school based curriculum decision-making)に注目し、検討する。この理論的検討をもとに、教師の役割遂行過程を分析する枠組として、（１）教師を中心としてなされる相互作用の実際、（２）教師による状況分析の実際、の２つを設定する。

第５章は、研究内容（５）に相当する。第４章で設定した分析枠組に基づいて、選択教科制の場合を中心に、教師の役割遂行過程を実証的に分析する。第１に、教師が選択教科制の運用を通して、開発者としてどのような役割を遂行しているかを明らかにする。第２に、コース設置をめぐる意思決定過程で、教師はどのような人々との相互作用を通して役割を判断し遂行しているか、を分析する。第３に、コース内容とその展開方法の決定をめぐって、教師は状況分析に基づく意思決定を行っているか、もし行っているとすれば、その状況分析の対象と特徴は何か、を検証する。

終章は本研究のまとめである。ここでは、教師が開発者としての役割を遂行するために

は、ナショナル・カリキュラムの強化政策の見直しと、教師の準備性(readiness)が重要であることを指摘している。最後に、カリキュラム開発に必要とされる教師の専門性の一つとして、「状況分析」の力量を提示する。

注）

(1)L. Stenhouse(1975), *Introduction to Curriculum Research and Development*, Oxford: Heinenan, p.3.

(2)山口によれば、日本において、カリキュラム開発という用語がカリキュラム研究の分野で使われるようになったのは、１９７４年東京で開かれた「カリキュラム開発に関する国際セミナー」の以後である。その後、従来のカリキュラム研究あるいはカリキュラム構成（編成）という言葉とややニュアンスの異なる意味をもった言葉として、カリキュラム開発が頻繁に使われるようになった。

山口満(1976)　「カリキュラムにおけるシステムズ・アプローチ」　金子孫市編『現代教育課程論』　第一法規　177頁-211頁。

山口満(1995)　「カリキュラム開発」　岩内亮一・荻原元昭・深谷昌志・本吉修二編『教育学用語辞典』　48頁。

(3)例えば、吉崎静夫の「授業実施過程における教師の意思決定」　『日本教育工学雑誌』８、1983　61頁-70頁を始めとし、教師の意思決定に関する多数の論文がみられるが、その大部分は主に教授行為に関するものであった。

(4)佐藤学は「教師を主体とする開発モデル」として＜実践・批評・開発モデル＞を提示し、カリキュラム開発への教師参加の重要性を強調している。

佐藤学(1996)　『カリキュラムの批評－公共性の再構築へ－』世織書房　32頁-36頁。

(5)「実践性」(the practical)の理論は、１９６９年シュワブによって初めて提唱されたものであるが、それは６０年代の論理的なカリキュラム理論を批判し、理論的強調から実践的強調へと転換を試みているものである。シュワブは前者は原理の統制によって行われるが、後者は何を行うかという実践的問題を捉え、状況的文脈を重視していると述べている。

J.J. Schwab(1969), The Practical: A Languge for Curriculum, *School Review* 78 (1), p.10.

(6)M. Ben-Peretz(1992), "Curriculum Development", in M. Alkin(ed.), *Encyclopedia of Educational Research*, Vo.1, New York: Macmillan Publishing Co.

p.259.

(7)これについての研究動向は、第２節でより具体的に検討している。

(8)この傾向については、デニス・ロートン著/勝野正章訳(1998)　『教育課程改革と教師の専門職性－ナショナルカリキュラムを越えて－』　学文社に紹介されている。

(9)田中統治(1996)　『カリキュラムの社会学的研究－教科による学校成員の統制過程－』東洋館　10頁。

(10)OECD(経済協力開発機構、Organisation for Economic Cooperation and Development)は、１９６１年9月３０日OEEC（欧州経済協力機構）が発展的に解消して再発足した国際機関である。そして、CERI（教育研究革新センター、Center for Educational Research and Innovation）は、OECDの内部機関として、フォード財団の援助を得て、１９６８年7月１日に設立された。CERIの存続期間は、当初３年間とされていたが、この期間における事業活動の意義が高く評価され、また、加盟国の大半が存続を希望した結果、１９７１年5月１２日の理事会で、１９７６年末まで5年間存続させることにした。しかし、その期間が終わっても、CERIは現在まで存続し多くの活動を行っている。

OECDの理事会が定めたCERIの活動の目的は次の３項目が挙げられている。

①OECD加盟諸国における教育研究活動の発展を促進させ、必要に応じて、そのような研究活動の事業を行うこと。

②加盟諸国に教育革新を導入するための実験計画を推進し、支援すること。

③教育研究および教育革新の分野における加盟国間の協力体制の発展を推進すること。

(11)これに関する代表的な研究例として次のものが挙げられる。

B.R. Wilson(1962), The Teacher's Role : A Sociological analysis, *British Journal of Sociology* 13(1), pp.15-32.

G.R. Grace(1972), *Role conflict and the teacher*, London: Routledge & Kegan Paul.

G.R. Grace(1974), "Vulnerablity and conflict in the teacher's role", in Eggleston, J., *Contemporary Research in The Sociology of Education*, London: Methuen, pp.214-227.

とりわけ、グレイスの１９７４年の研究は、ウィルソンの教師の役割葛藤に関する理論的分析に基づき、教授状況における教師の役割葛藤について、実証的に分析した

ものである。しかし、これらの研究はカリキュラムよりも、主に教授(teaching)に関する役割に限られているものである。

カリキュラム分野における教師の役割に関する社会学的研究は、エグルストン(Eggleston, J.)によって行われている。エグルストンは、バーンステイン(Bernstein, B. B.)のコード(code)理論が、再構成的パースペクティブ(restructuring perspective)を成す状況から生じる専門的意思決定に関する考察の手がかりを提示している、と述べている。彼はこの「再構成的パースペクティブ」がカリキュラムにおける教師の役割の特徴を明らかにすることにおいて、どのように用いられるか、また、教師の意識とカリキュラムの構造(the structure of the curriculum)とが教師が使用するカリキュラムの内容と分配、評価を規定することにどのように相互関連するか、を検討している。

J. Eggleston(1977), *The Sociology of the School Curriculum*, London: Routledge & Kegan Paul, pp.75-98.

日本においては、学校カリキュラムに関する社会学的分析視角から、教師の役割を分析している田中の研究が注目される。

田中統治(1979)「学校カリキュラムにおける教師の役割 -社会統制の概念と関連して-」 九州大学教育学部 『紀要』 第２５集 149頁-164頁。

(12)ヤングも、カリキュラム開発における教師の役割に関する研究を２つに対比し分類している。すなわち、一つは教室での教師の自律性と生徒との触れあいから得られる経験を認める研究と、もう一つはより幅広い組織の構造の一部分として捉えようとする研究である。ヤングは後者の立場であるということを明らかにしている。また、キムストンも、教師の役割に関する研究の動向を２つに区分している。すなわち、教師はカリキュラムの研究・開発に参加することを望んでいると主張する研究と、そうではないと主張する研究とを区分している。彼は前者の立場であることを明らかにしている。

J.H. Young(1985), Participation in Curriculum Development: An Inquiry into the Responses of Teachers, *Curriculum Inquiry* 15(4), pp.387-390.

R.D. Kimpston(1985), Curriculum Fidelity and the Implementation Tasks Employed by Teacher: A Research Study, *Journal of Curriculum Studies* 17(2), pp.185-186.

(13)J.H. Young, op.cit.

J.H. Young(1979) The Curriculum Decision-making Preferences of School Personnel, *The Alberea Journal of Educational Research* 25(1), pp.20-29.

(14)F.G. Robinson(1982), "Superordinate curriculum guidelines: Their role in classroom decision making", in K.A. Leithwood(ed.), *Studies in Curriculum Decision making*, Toronto: The Ontario Institute for Studies in Education, pp.132-154.

(15)R.A. MacDonald & K.A. Leithwood, "Toward an explanation of the influences on teachers' curriculum decisions", in K.A. Leithwood, op.cit., pp.35-48.

(16)J.K. Olson & R. Kitto(1977), *The Role of the Teacher in Curriculum Development*, Paper presented at the annual meeting of the Canadian Association for Curriculum Studies, New Brunswick, June.

(17)D.C. Lortie(1975), *School Teacher*, Chicago: University of Chicago Press.

(18)F.M. Connelly(1972), The Functions of Curriculum Development, *Interchange* 3(2,3), pp.161-177.

(19)F.M. Connelly & M. Ben-Peretz(1980), Teacher's Roles in the Using and Doing of Research and Curriculum Development, *Journal of Curriculum Studies* 12(2), pp.95-107.

(20)F. Elbaz(1981), The Teacher's 'practical knowledge' : Report of a case study, *Curriculum Inquiry* 11(1), pp.43-71.

(21)W. Harlen(1977), A Stronger Teacher Role in Curriculum Development?, *Journal of Curriculum Studies* 9(1), pp.21-29.

(22)R.D. Kimpston, op. cit., p.185.

(23)ibid., pp.185-186.

(24)J.H. Young(1985), op.cit., p.388.

(25)K.A. Leithwood, J.A. Ross & D.J. Montgomery, "An investgation of teacher's curriculum decision making", in K.A. Leithwood(ed.), op. cit., pp.14-26.

(26)R.A. MacDonald & K.A. Leithwood, op. cit., p.44.

(27)F.M. Connelly & M. Ben-Peretz, op. cit., p.95.

(28)W. Harlen, op. cit., p.21.

(29)G.O. Martin-Kniep(1992), Teachers as Curriculum Developers, *Journal of Curriculum Studies* 24(3), p.261.

(30)J.H. Young(1985), op. cit., p.388.

ヤングは①の研究としてクラークとインガー(Clark, C.M., Yinger, R.J.)、②の研究はリースウッド、③の研究はオバーグ(Oberg, A.A.)を挙げている。

C.M. Clark, & R.J. Yinger(1977), Research on Teacher thinking, *Curriculum Inquiry* 7(4), pp.279-304.

K.A. Leithwood(ed.), op. cit.

A.A. Oberg(1977), *A method of asertaining characteristics of classroom teachers' curriculum planning decisions*, Paper presented to the Canadian Society for the Study of Education, New Brunswick.

(31)F.M. Connelly & M. Ben-Peretz, op. cit., p.95.

(32)M. Ben-Peretz(1992), "Curriculum Development", in M.C. Alkin(ed.), *Encyclopedia of Educational Research*, Vo.1, New York: Macmillan Publishing Co., p.259.

(33)N. Sabar & N. Shafriri(1979), Workshop for Teachers as Curriculum Developers and Implementers, *Journal of Curriculum Studies* 11(1), p.87.

(34)J.D. McNeil(1985), *Curriculum: A Comprehensive Introduction*(third ed.), Boston: Litte, Brown, pp.236-237.

(35)D. Tanner & L.N. Tanner(1980), *Curriculum Development*(2nd ed.), New York: Macmillan Publishing Co., Inc., pp.636-638.

(36)M. Print(1993), *Curriculum Development and Design*(2nd ed.), Sydney: Allen & Unwin, pp.17-19.

(37)J. Eggleston(1979), "School-Based Curriculum Development in England and Wales", in OECD/CERI, *School-based Curriculum Development*, pp.88-101.

(38)P. Knight(1985), The Practice of School Based Curriculum Development, *Journal of Curriculum Studies* 17(1), pp.39-42.

(39)M. Ben-Peretz & B.Z. Dor(1986), *Thirty Years of School Based Curriculum Development: A Case Study*, Paper presented of the 1986 annual meeting of the American Education Research Association, San-Francisco.